

IIAS 塾ジュニアセミナーテキスト
(VOL. 02019)

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて
ー日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追うー
世界の中の日本。科学・文化の諸相に彼我の風土の違いを発見した人物

（思想・文学分野）

内村鑑三に学ぶ

～今に光彩を放つ「明治の精神」
台木としての「武士道」、接木としての「基督教」～

公益財団法人国際高等研究所
IIAS 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2017年2月10日開催の第44回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。

※本テキストは、2019年春季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

世界の中の日本。科学・文化の諸相に彼我の風土の違いを発見した人物

「明治の精神」としての内村鑑三

「明治の精神」の典型的存在は、近代日本の代表的基督者、内村鑑三に他ならない。徳富蘇峰は、「内村さんのような人が明治に産出したことは明治の光だと思う。」と90歳のときに語った。内村は、『代表的日本人』の「独逸語版跋」の中で「此書は、現在の余を示すものではない、これは現在基督信徒たる余自身の接木せられてある台木の幹を示すものである。」と書いた。この「台木」とは、単に歴史的教養を意味しているのではない。人格的なものにまで形成されたエトスとパトスの蓄積である。そして、その蓄積を回想し、自覚している精神である。

「明治の精神」は、「台木」を持っているだけでは生まれない。何ものかが、「接木」されなくてはならないのである。内村鑑三の場合は、いうまでもなく「基督教」が接木されたのであり、福澤諭吉の場合は、「文明」が、岡倉天心の場合は、「フェノロサの眼」が、中江兆民の場合は、ルソーが、夏目漱石の場合は、英文学が、といった具合に、それぞれの「台木」の個性と宿命に応じて様々なものを「接木」したのである。

「明治の精神」が生き生きとしていたのは、大体、日露戦争の勝利までであろう。それ以降、この劇的な精神は次第に薄れていく。自然主義、大正デモクラシー、マルクス主義、戦時下の日本主義と移り変わり、やがて敗戦を迎えた。そして、戦後70余年とは、精神的エネルギーを鍛えることなく、今日の空虚な日本、三島由紀夫のいわゆる「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の」日本に墮していくだけの時間であった。

ますます深刻化する危機の中にある日本を立ち直らせるためには、「明治の精神」の代表的存在である内村鑑三を深く理解し、そこから精神的エネルギーを汲みとらなければならない。

新保 祐司 (Yuji SHIMPO)

1953年、仙台市に生まれる。昭和52年、東京大学文学部仏文科を卒業後、出光興産に入社。平成2年、『内村鑑三』（構想社）を上梓、新世代の文芸批評家として注目を集める。平成8年、都留文科大学助教授に就任。平成10年、教授に昇任。平成26年より、副学長・教授。平成17年、『信時潔』（構想社）を上梓、「海ゆかば」の作曲家・信時潔を復権させた。平成19年、フジサンケイグループ正論新風賞を受賞。平成29年には、フジサンケイグループ正論大賞を受賞。

著書に、『島木健作一義に飢ゑ渴く者』（リポート）『日本思想史骨』『国のさゝやき』『鈴二つ』（以上 構想社）『フリードリヒ 崇高のアリア』（角川学芸出版）『異形の明治』（藤原書店）『シベリウスと宣長』『ハリネズミの耳―音楽随想』（以上、港の人）など多数。編著に『「海ゆかば」の昭和』（イプシロン出版企画）などがある。近著は『「海道東征」への道』（藤原書店）『散文詩集 鬼火』（港の人）。



目次

はじめに

－ 近代日本における内村鑑三の影響

I 「明治の精神」の諸相

- (1) 夏目漱石が描く「明治の精神」
- (2) 森鷗外が描く「明治の精神」
- (3) 保田輿重郎が描く「明治の精神」

II 「明治の精神」としての内村鑑三

- (1) 「明治の精神」、その誕生劇
- (2) 代表的「明治の精神」、内村鑑三の姿
 - ① 内村鑑三の胸像写真に見る「明治の精神」
 - ② 最も代表的な「明治の精神」、内村鑑三
 - ③ 「明治の精神」内村鑑三の誕生、その経緯
 - (ア) 武士の子「内村鑑三」
 - (イ) 「内村鑑三」の旅立ち
 - (ウ) 「一高不敬事件」の発生
 - (エ) 文筆家「内村鑑三」の誕生

III 「内村鑑三」の弟子たち

- (1) 近代日本の背骨を支える弟子たち
 - ① 近代日本において、各地で「地の塩」の役割を果たす、その弟子たち
 - ② 日本を代表する良質なアカデミズムを形成する、その弟子たち
- (2) 「内村鑑三の勝利」の意義とその行方
 - ① 近代日本に誕生した質の高い知的空間
 - ② 明治維新の動乱がもたらした「明治の精神」
 - ③ 「明治の精神」に続く日本社会の行方
- (3) 「内村鑑三の勝利」に連なる人物
 - ① 「知識人」たち
 - ② 「芸術家」たち

IV 内村鑑三の墓碑銘が語る、その「志」

- (1) 内村鑑三が愛する「二つの J」－Jesus と Japan

- ① 螺旋構造をとる「二つの J」
- ② 「I for…」の形をとる「二つの J」

(2) 内村鑑三の精神の在処

- ① 内村鑑三の著作『代表的日本人』
- ② 「内村鑑三」の神髄、エキセントリック
- ③ 「侍クリスチャン」の誕生

おわりに

－「明治の精神」を学び直す

補遺

「内村鑑三」の像を、言語で彫刻する。

質疑応答

次代を拓く君たちへ — 新保祐司からのメッセージ —

大事は、「自己」を恃みて生きるところにある。

2017年2月10日開催

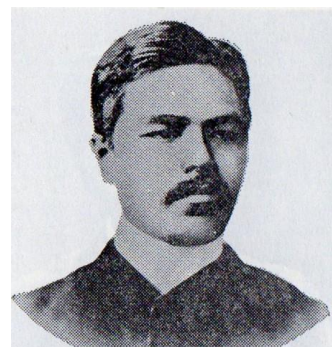
第44回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：「明治の精神」としての内村鑑三

講演者：新保 祐司（都留文科大学副学長・教授）

はじめに - 近代日本における内村鑑三の影響

内村鑑三は、一言でいえば、近代日本の中心人物というよりも重石といえる人物である。例えば、夏目漱石、森鷗外、永井荷風¹などのほか、さらに、福沢諭吉、岡倉天心²など明治の偉人といわれる人がいる。そのような人と比べると、内村鑑三は、一般の人にそれほど知られていない。普通に皆が、漱石の小説を読むようには親しみが無い。だが、近代日本、少なくとも明治、大正、あるいは戦前の日本が、それほど崩れなかったのは内村鑑三という人物がいたとことが大きい。内村鑑三の影響を受け、深く学んだ人たちがいかに多くいたか、意外に思われるくらいである。



内村鑑三

Public domain,
via Wikimedia Commons

Ⅰ 「明治の精神」の諸相

(1) 夏目漱石が描く「明治の精神」

「明治の精神」という言葉を、我々が目にするのは夏目漱石の小説『こころ』の最終章においてである。主人公の先生が、明治天皇が亡くなり明治が終わったとき、「明治の精神」が終わった気がすると言って、乃木大将³の殉死に続いて先生も殉死する。結局自死する。夏目漱石という、ある意味、文明開化の中で近代日本のあり様を書いてきた代表的人間が、明治天皇の死と乃木大将の殉死に直面して、「明治の精神」ということを突然言い出し、主人公を殉死させる。その後、漱石は朝日新聞の社員でもあったから、仕事として『明暗』などの小説をいろいろと書いている。例えて言えば、午前中、食費扶持のために朝日新聞の社員として小説を書き、午後は、漢詩を書いて楽しんでいた。ある先生に言わせると、漱石の文学の最高傑作は漢詩であって、近代小説ではないという。漱石はそういう意味で漢詩に自己表現の最たるものを持っていたと言える。

¹ 永井荷風（1879-1959<明治12-明治12>）：小説家。『溷東綺譚』等を執筆。

² 岡倉天心（1863-1913<文久2-大正2>）：思想家、文人。美術行政家、美術運動家として近代日本美術の発展に大きな功績を残した。

³ 乃木希典（1849-1912<嘉永2-大正元>）：軍人、教育者。明治天皇の後を慕って殉死したことで国際的にも著名。

(2) 森鷗外が描く「明治の精神」

では、二大文豪の一人である森鷗外はどうであったか。1912（明治45）年、小説『かのように』を書く。そこで、いわゆる絶対があるかのように、真実があるかのように、最高の権威があるかのように思わなければ社会は成り立たないと言いつつ、そのようなものは、ありはしないと言う。しかし、それは、小説では言えても陸軍軍医総監たるトップとしては言えない。現実には、あるかのように思わなければ成り立たないと言う。これが聡明な保守主義者、根本的に懐疑主義者だった鷗外の本質である。陸軍軍医総監、皇室図書館館長と、栄誉を究めた鷗外が死ぬとき何と言ったか。バカバカしいと言って死んだ。鷗外にとっては、すべてがバカバカしかった。しかし、彼は森家の長男として明治国家を支えた。その鷗外が小説『かのように』を書いた後、明治天皇が亡くなり、その後を追って乃木大将が殉死した。乃木大将は長州の出身であった。鷗外も津和野藩出身であって、その関係は近い。乃木大将殉死の話聞いたとき、鷗外は半信半疑だった。それが事実だと分かったとき、鷗外は、言い伝えでは、一晩で『興津弥五右衛門の遺書』という武士の殉死を描いた小説を書いた。それが鷗外の歴史小説の初めての作品であった。鷗外は、近代に愛想をつかした。それ以降書いたのはすべて歴史小説である。例えば『渋江抽齋』。近代末期の渋江抽齋がいかに偉かったかを、少し変態的な崇拜感を持って書いている。

このような漱石や鷗外が描いた小説を背景に、内村鑑三という人間を並べてみると、新たな人間像が見えてくる。



乃木希典（愛称:乃木大将）
Public domain,
via Wikimedia Commons

(3) 保田輿重郎が描く「明治の精神」

「明治の精神」というものが評論的にかげん話題になったのは、評論家の保田輿重郎が1937（昭和12）年に『明治の精神』というタイトルの長編を書いてからである。これはなかなかのもので、保田はこれを26歳で書いている。保田がいかに早熟だったかに改めて驚かされる。その中で実に素晴らしいことを書いている。「明治の精神」として保田は、岡倉天心と内村鑑三の二人を取り上げている。天心と鑑三についての本質把握が実に素晴らしい。把握の素晴らしさは秀才的というより天才的である。研究論文のように天心はこう、鑑三はこうというのではない。何が何だか分からないが、思わず「ああっ」という感じの天才的把握である。

II 「明治の精神」としての内村鑑三

(1) 「明治の精神」、その誕生劇

「明治の精神」にはもちろんいろいろな人がいる。その代表的な人物として内村鑑三を取

り上げたい。「明治の精神」は、内村鑑三とか新渡戸稲造⁴とか、基本的には武士の子である。彼らはだいたい 1861（万延元—文久元）年前後に生まれている。明治維新のときに何歳であったかが非常に重要である。明治維新のときに 6 歳とか 7 歳とかであった。彼らは江戸時代、いわゆる徳川時代までの儒教を中心として、武士道や、国学をしっかりと学んでいる。それを体で学んでいる。例えて言えば、それが一つの台木となって、その台木に西洋の文化、文明が接ぎ木されている。日本的なる台木と、西洋的なる接ぎ木とは極端に違っていた。ある意味では、そこで劇的な化学反応が起きた。

鴎外はドイツに行く。漱石は漢文学が大好きだったにもかかわらず、心ならずも英文学を学びにイギリスに行く。東大の先生になるために一生懸命勉強したが、全然なじめない。他方、天心はフェノロサ⁵と出会う。内村鑑三のほか、新渡戸稲造もキリスト教と出会う。ここで大変なことが起きる。

（2）代表的「明治の精神」、内村鑑三の姿

① 内村鑑三の胸像写真に見る「明治の精神」

内村鑑三の顔を 30 分見ていれば鑑三が分かる。そのような分かり方をしなければいけない。Wikipedia で検索し、百科事典をめくって、内村鑑三という人は何年に生まれて札幌農学校を何年に出てなどと知っても意味がない。そのような知り方を打ち砕くのが内村鑑三である。この顔を 30 分見ていられるかどうかである。この顔が明治の顔である。「明治の精神」である。

右の写真は、1918（大正 7）年、札幌の独立教会で聖書講義をするに当たって、登壇する直前の内村鑑三である。左手に聖書。出で立ちには当時三越で売っていた透明の板が入っていて胸がぐっと反る「イカムネのワイシャツ」である。なよっとしたものでなく、びしっとした「イカムネのワイシャツ」でなければならない。

私は、若い時、筑摩書房の明治文学全集に収録されている『内村鑑三』の編に掲載されていた内村鑑三の写真を図書館で見た。その時、思わずくらくらとしてしゃがみ込んでしまった。この顔はすごい。

このような顔は見たことがない。それが私の「内村鑑三」研究の一つの原点である。



内村鑑三
Public domain,
Wikimedia Commons

⁴ 新渡戸稲造（1862-1993<文久 2-昭和 8>）：教育者・思想家。著書 Bushido: The Soul of Japan（『武士道』）は、流麗な英文で書かれ、長年読み続けられている。

⁵ フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908）：明治時代に来日したお雇い外国人。日本美術を評価し、紹介に努めたことで知られる。

2011（平成23）年、藤原書店から、内村鑑三生誕150周年を記念して雑誌の特集が組まれた。その時の表紙写真に、この写真を使っていた。出版社の方は、すべてが黒っぽいこの顔では本が売れないだろうと言う。私の方は、本が売れるか売れないかは関係ない。立派なこの写真をとお願いした。

② 最も代表的な「明治の精神」、内村鑑三

内村鑑三は、近代日本の根源的批判者である。近代日本をいろいろ評論している人はたくさんいる。その中で、内村鑑三は最もラディカルな批判者である。そう言われたら終わりだというようなところのある根源的な批判者である。しかし、この根源的批判者を明治、大正の日本人は受け止めた。それだけの力があつた。

「明治の精神」は、日本的なものの台木に西洋的なものが接ぎ木されたものである。接ぎ木されたものの個性によって、漱石とか、鴎外とか、鑑三とか、それぞれが枝葉を繁げらせていく。最も日本的なものと、キリスト教という最も対立する西洋的なものが、ぶつかった挙句にドラマが起きた。それが内村鑑三である。最も代表的な「明治の精神」である。

③ 「明治の精神」内村鑑三の誕生、その経緯

（ア） 武士の子「内村鑑三」

内村鑑三は、高崎藩の下級武士の家に生まれた。父、内村宜之は学者的な人だった。その長男として江戸屋敷で生まれた。新渡戸稲造などと同様、没落士族で、お金の窮していた。そこで学費などすべてタダの札幌農学校に行くこととした。その学校は、佐幕派のすごく優秀な武士の子供たちが多く行く学校であつた。札幌には何もない。当時、数百人しか住んでいなかった札幌、その何もないフロンティアで彼らは学ぶこととなる。そこにクラーク先生が校長で来て、「Boys, Be ambitious」という有名な言葉を発する。

ところで、石橋湛山⁶も内村鑑三の影響を受けた人物である。石橋湛山は、なぜあのような信念のある男であつたのか。すべては「明治の精神」のキリスト教的なものにつながる。石橋湛山は甲府中学、現在の甲府第一高等学校の出身である。その甲府第一高等学校校門の前に大きな石があり、そこに、「Boys, Be ambitious 石橋湛山」と書かれている。これはどうしてか。内村鑑三と新渡戸稲造は札幌農学校の2期生であるが、1期生に大島正健⁷という言語学者がいて、当時甲府中学の校長をしていた。この校長は人格者であつた。教育に当たって人格がにじみ出てくるものがあつた。石橋湛山をはじめ生徒は大きな影響を受けた。

⁶ 石橋湛山：1884-1973<明治17-昭和48>：日本のジャーナリスト、政治家、教育者（立正大学学長）。大蔵大臣（第50代）、通商産業大臣（第12・13・14代）、内閣総理大臣（第55代）、郵政大臣（第9代）などを歴任。

⁷ 大島正健（1859-1938<安政6年-昭和13>）：日本人の宗教家・教育者・言語学者。札幌農学校（現在の北海道大学）の第1期生であり、クラーク博士の教育指導を直接受けた一人となった。クラークの'Boys, be ambitious'（青年よ、大志をいだけ）との言葉を後世に残す上で大きな役割を果たした。

これこそ教育者であると言って「Boys, Be ambitious」を覚えた。石橋湛山の家に行くと、「Boys, Be ambitious」と書かれたものが掛かっていた。大橋正健の札幌農学校の精神が石橋湛山にもつながっている。

(イ)「内村鑑三」の旅立ち

内村鑑三は、札幌農学部を出た後に北海道庁に入る。もともとは科学系の人で、水産学を学んでいた。文学系を嫌っていた。北海道庁に入って鮭などに関する素晴らしい研究を行った。その後、浅田タケと結婚したが、半年で破たんした。そのようなこともあって、アメリカに留学する。アメリカではお金がなくて大変なことになったが、ともかく、新島襄に勧められてボストン郊外にある名門のアマースト大学に留学する。この大学は新島襄が学んだ大学である。アマースト大学でシーリー⁸という総長に会い、深い影響を受ける。今でもアマースト大学の図書館には、内村鑑三の肖像があり、そこには、「Japanese Independent Christian」、日本の独立系クリスチャン内村鑑三と書かれている。その後、日本に戻り、北越学館⁹で教鞭をとる。内村は若いときケンカの内村と言われ、そこでもすぐケンカをし、程なく辞めて、当時の第一高等学校の嘱託教員となる。

(ウ)「一高不敬事件」の発生

第一高等学校では、いわゆる「一高不敬事件」を起こした。その時、一高にクリスチャンの先生が3人いた。教育勅語を掲げて式典を挙行すれば問題が起きるであろうことは予想された。他の2人の先生はどうしたか。病気で欠席した。内村は、最後まで悩んだが、式典に出席した。そこで彼はどうしたか。一応ちょこっと頭を下げた。それが問題になった。不敬漢である、国賊であると言われ、家に石を投げられることとなる。そうしたことが重なり、二番目の奥さんは心労のあまり20代で亡くなる。当時、国賊扱いになると、一切仕事がなくなる。彼は京都に行って極貧の生活をする。

(エ) 文筆家「内村鑑三」の誕生

内村は、京都で著作活動に入る。その頃、徳富蘇峰が「国民之友」を創刊する。その時、国木田独歩は新聞記者であった。徳富蘇峰が内村に原稿を依頼する。日本社会の中に埋もれるであろうと思われた内村鑑三を引っ張り出し、ジャーナリスト的な活動をさせた。さらに、新聞「萬朝報」の社主、黒岩涙香が内村鑑三を英文欄の主筆として呼び出す。そこで内村は東京に出ていき、「萬朝報」の英文主筆として腕をふるう。英語の主筆として、



「萬朝報」

Fraxinus2, CC BY-SA 4.0
Wikimedia Commons

⁸ シーリー (Julius Hawley Seelye, 1824 - 1895) : アメリカ合衆国の宣教師、作家、アマースト大学の学長であった。新島襄と内村鑑三の恩師として知られる。

⁹ 北越学館：明治時代前期に新潟に存在した、新潟県最初のキリスト教主義の私立男子学校である。1885年(明治18年)に開校された私立新潟英学校が母体になっている。

日本語では書けないような批判を書く。そのようにして内村は世に出てくる。その時、彼は一方で1900（明治33）年、個人誌『聖書之研究』出版する。

III 「内村鑑三」の弟子たち

（1）近代日本の背骨を支える弟子たち

① 近代日本において、各地で「地の塩」の役割を果たす、その弟子たち

1900（明治33）年、個人誌『聖書之研究』出版以来、多くの弟子ができる。あの志賀直哉も17歳の時から7年間内村の弟子として過ごした。その後、志賀は文才に長けていたこともあって、小説を書いて身を立てていくこととなる。

後、いろいろな人が出てくる。例えば岩波茂雄。内村鑑三が今この世で大きな存在になっている一つには、1930（昭和5）年、内村鑑三が亡くなったとき、岩波書店から内村鑑三全集、20巻が出たことが大きい。その時、田舎の駅長さんとか、田舎の小学校の校長さん、農家の息子さんとか、そういう人が岩波書店に注文をたくさん入れた。岩波書店が驚いた。文学全集などには都会のインテリ層が関心を寄せる。今回は、インテリ層でなく、地方の、まさに「地の塩」ともいうべき人たちが内村鑑三全集を予約した。これこそまさに大事なことである。近代日本においては、「地の塩」の役割を果たした人が、地方にいっぱいいたということである。

② 日本を代表する良質なアカデミズムを形成する、その弟子たち

内村はあまりインテリが好きではなかった。しかし、東大総長や文部大臣が内村鑑三の弟子であった。例えば、前田多門は、東京都の役人で後藤新平のブレーンだったが、戦後文部大臣になる。あるいは文部大臣になる天野貞祐。後の東大総長、矢内原忠雄、南原繁。これらは一高時代の内村の直接的な弟子であった。なぜか。当時一高の校長は新渡戸稲造であった。新渡戸稲造のところに、聖書を学びに来るものがあると、彼は、聖書を学ぶのであれば、内村のところに行けと言う。日本のエリートたちは、こぞって、当時無冠の男だった内村鑑三のところに行った。戦後の日本を代表する、質のいいアカデミズムを形成した人たちは皆そうであった。つまり、戦後の質のいいアカデミズムは頭のよい人たちが作ったのではない。内村鑑三のような不敬事件を起こした人に学ぶことの意味が分かる人間たちであった。

（2）「内村鑑三の勝利」の意義とその行方

① 近代日本に誕生した質の高い知的空間

内村は、「一高不敬事件」から12年しか経っていない時期に、全く肩書が何もないまま『聖書之研究』を出す。そこに志賀直哉が弟子入りする。志賀直哉の親もそれを許す。人間の何がすごいかが分かっている。今であれば、内村鑑三のところ弟子入りするとは何ごとかと言って止めるであろう。それが、当時は、レベルの高い質の良い文化があって、内村先

生は偉いということを皆が分かっていた。そういう人間観があって、東大総長となる矢内原忠雄や南原繁などが内村鑑三の弟子になって一緒に写真に納まっている。こういうことを不自然に思わない。人間の質の高さとか、何が大事かを分かっている人が東大で経済学を、あるいは法学を学んだ。このような質の高い一種の知的空間、知的サークルが近代にはあり得た。「内村鑑三の勝利」ということでもある。

② 明治維新の動乱がもたらした「明治の精神」

ポール・ヴァレリー¹⁰ は、20世紀の最高の知性と言われているが、その人が、「マネの勝利」というすばらしい批評を書いている。19世紀のフランスの知的世界を絵にすると、エドゥアール・マネが思い描かれる。マネの後ろに、もちろん画家のセザンヌとか、詩人のボードレールもいる。マネを通してすばらしい世界が成り立っている。

そういう意味で、近代日本の知性に、近代日本の知の世界に、どのような栄光があったかを書こうとすると、「内村鑑三の勝利」を書くこととなる。そこに音楽家であろうと、思想家であろうと、文学者であろうとすべて出てくる。この人も、この人もと、逆に関係のない人がいないのではないかという感じになる。もっと言うと、根本的な、あるいは絶対的なものがあるかのような感覚を明治の日本は持っていた。それはおそらく明治維新¹¹というか、戊辰戦争¹²というか、それらを経験したことが大きい。幕末から明治にかけての動乱期、そこには^{あつぽ}坩堝ともいべき状態があって、その中で皆ごちゃごちゃになって、かなりのものが滅びたが、そこにまた新しいものが出てきた。

③ 「明治の精神」に続く日本社会の行方

日本は、これから相当の混乱期を迎えるに違いないが、坩堝が大事である。その中から、いわゆる「人物」が生まれてきた。今の日本が問題なのは、混乱を恐れて坩堝にならない。坩堝になりかかっているにもかかわらず、変に取り繕って坩堝になることを恐れている。逆に坩堝になってしまえばいい。混乱を避けるために修正を行い、本当の坩堝にならずに人間が変になって、おかしくなっていくところが日本にはある。

(3) 「内村鑑三の勝利」に連なる人物

① 「知識人」たち

「内村鑑三の勝利」に連なる人物を挙げると、次のとおりであり、内村鑑三の影響がいかに広範囲だったかをうかがい知ることができる。

¹⁰ ポール・ヴァレリー (Ambroise Paul Toussaint Jules Valéry, 1871 - 1945) : フランスの作家、詩人、小説家、評論家。多岐にわたる旺盛な著作活動によってフランス第三共和政を代表する知性と称される。

¹¹ 明治維新は、徳川幕藩体制崩壊から明治新政府による中央集権的統一国家成立と資本主義化の出発点となった一連の政治的・社会的変革。

¹² 戊辰戦争は、1868年1月から翌年5月にかけて、維新政府軍と旧幕府派との間で行われた内戦。

氏名	生年月日	履歴	備考
黒岩涙香	1862 - 1920 (文久2-大正9)	日本の小説家、思想家、作家、翻訳家、ジャーナリスト。『萬朝報』を創刊。	『萬朝報』に、内村、論客として参画。
北村透谷	1868 - 1894 (明治元-明治27)	評論家・詩人。明治期に近代的な文芸評論をおこない、島崎藤村らに大きな影響を与えた。	内村「不敬事件」を機に、国家と宗教に関心。
国木田独歩	1871 - 1908 (明治4-明治41)	日本の小説家、詩人、ジャーナリスト、編集者。1894年、徳富蘇峰の『国民新聞』の記者となる。	内村の「聖書研究会」に参加。親交を結ぶ。
長谷川如是閑	1875 - 1969 (明治8-昭和44)	ジャーナリスト、文明批評家、評論家、作家。大正デモクラシー期の代表的論客の一人。	「自由の精神」を宗教に置く内村を崇敬
有島武郎	1878 - 1923 (明治11-大正12)	明治・大正に活躍した作家で、社会運動家で、自由恋愛論者。	内村の後継者と期待されていた弟子。
正宗白鳥	1879 - 1962 (明治12-昭和37)	明治から昭和にかけて活躍した小説家、劇作家、文学評論家。	内村の著作を耽読し、キリスト教徒となった。
志賀直哉	1883 - 1971 (明治16-昭和46)	白樺派を代表する小説家。「小説の神様」と称せられ、多くの日本人作家に影響を与えた。	内村を慕って集まって来た多くの若者たちの一人
安部能成	1883 - 1966 (明治16-昭和41)	日本の哲学者、教育者、政治家。第一高等学校校長、文部大臣、学習院院長などを務めた。	『聖書之研究』を愛読。内村の聖書講義に出席。
前田多門	1884 - 1962 (明治17-昭和37)	政治家、実業家、文筆家。鶴見祐輔、田島道治、岩永裕吉とともに「新渡戸四天王」と呼ばれた。	内村の聖書研究会に入門、多大な影響を受けた。
天野貞祐	1884 - 1980 (明治17-昭和55)	日本の哲学者・教育者。京大教授。第二次世界大戦後は第一高等学校校長・文部大臣。	『後世への最大遺物』を読んで、人生を見直す。
武者小路実篤	1885 - 1976 (明治18-昭和51)	小説家・詩人・劇作家・画家。志賀直哉らと文学雑誌『白樺』を創刊。白樺派の思想的な支柱。	志賀直哉と内村の演説を聞きに行っている。
塚本虎二	1885 - 1973 (明治18-昭和48)	無教会主義の伝道者、新約聖書研究家。農商務省に入省するも、退官し聖書研究に専念。	東大在学中1909年に内村の柏木聖書研究会に入門。
荒畑寒村	1887 - 1981 (明治20-昭和56)	社会主義者・労働運動家・作家・評論家。生涯は、日本社会主義運動の良心の軌跡とされている。	『萬朝報』購読を通じて社会主義思想に感化される。
大内兵衛	1888 - 1980 (明治21-昭和55)	元東京大学教授、法政大学総長。大正・昭和期の日本のマルクス経済学者。専攻は財政学。	内村の影響を受けた人々との交流から内村を発見。
南原 繁	1889 - 1974 (明治22-昭和49)	日本の政治学者。東京帝国大学の総長を務めた。一高入学、校長、新渡戸稲造の響を受けた。	学生時代から内村の弟子。無教会主義の熱心な信者。
高木八尺	1889 - 1984 (明治22-昭和59)	政治学者、アメリカ研究者、政治家。東京大学名誉教授、日本学士院会員。	一高、東大卒業。新渡戸、内村の影響を受ける。
矢内原忠雄	1893 - 1961 (明治26-昭和36)	日本の経済学者。東京大学総長。在学した神戸中の校長鶴崎は、札幌農学校で新渡戸と同期。	一高在学中に、内村の聖書研究会に入門。
柳田 泉	1894 - 1969 (明治27-昭和44)	明治文学研究者、翻訳家。トルストイの小説など多くの思想哲学書を翻訳出版。	『日本の良心・内村鑑三』を執筆し、内村を回想。
向坂逸郎	1897 - 1985 (明治30-昭和60)	日本のマルクス経済学者・社会主義思想家。社会主義協会を創設、日本社会党左派の理論的支柱。	「自分の道の行ける人」内村の生きざまに共感。
内村祐之	1897 - 1980 (明治30-昭和55)	医学者、精神科医。専攻は臨床精神医学・神経病理学。東京大学教授、後、国立精神衛生研究所長。	「熱烈な真理の憧憬者」父、内村の影響を受ける。
大久保年謙	1900 - 1995 (明治33-平成7)	歴史学者。大久保利通の孫。日本近代史学研究を、草創期から大きく発展させた。	明治時代の日本の精神史の代表として評価。
高田博厚	1900 - 1987 (明治33-昭和62)	彫刻家、思想家、文筆家、翻訳家。高村光太郎の勧めで彫刻や翻訳に従事。	日本の知性の最高峰としての内村の胸像を作成。

下村寅太郎	1902 - 1995 (明治 35-平成 7)	哲学者・科学史家。科学史から芸術・美術史、精神史まで幅広い論考著述を行った。	『余は如何にして基督信徒となり乎』愛読。
小林秀雄	1902 - 1983 (明治 35-昭和 58)	文芸評論家、編集者、作家。近代日本の文芸評論の確立者であり、晩年は保守文化人の代表者。	内村の『代表的日本人』にその行跡の本質を発見。
河上徹太郎	1902 - 1980 (明治 35-昭和 55)	日本の文芸評論家。フランス象徴主義の影響に基づく評論活動を展開、近代批評の先駆者。	内村などの思想と行動を『アウトサイダー』の名のもとに解明
加藤楸邨	1905 - 1993 (明治 38-平成 5)	日本の俳人、国文学者。人間の生活や自己の内面に深く根ざした作風を追求、「人間探求派」。	父は内村鑑三の唱導する無教会主義クリスチャン。
大塚久雄	1907 - 1996 (明治 40-平成 8)	経済史学者。専攻は英国経済史。その研究は「大塚史学」として国際的評価を受けた。	大学時代、毎日曜の内村の聖書講義に出席
亀井勝一郎	1907 - 1966 (明治 40-昭和 41)	文芸評論家。『文學界』に、ライフワークとして「日本人の精神史研究」を連載。	正当な「非寛容の精神」の持ち主、内村を尊敬。
太宰 治	1909 - 1948 (明治 42-昭和 23)	小説家。『斜陽』はベストセラー。主な作品に『走れメロス』『津軽』『お伽草紙』『人間失格』。	内村の書に影響を受け、信仰世界に接近。
保田與重郎	1910 - 1981 (明治 43-昭和 56)	文芸評論家。近代文明批判と日本古典主義を展開。日本浪漫派の中心人物。	内村を完璧な日本人であり、かつ世界人と評価。
松田智雄	1911 - 1995 (明治 44-平成 7)	経済史学者、東京大学教授。近代ドイツ経済史を研究。	内村に「プロテスタント主義の倫理」「経済倫理」を発見。
氷上英廣	1911 - 1986 (明治 44-昭和 61)	ドイツ文学者、東京大学教授。ドイツ文学、比較文学、比較文化専攻。	日本の精神史における内村の位置付けを喚起。
中村光夫	1911年-1988 (明治 44-昭和 63)	文芸評論家、作家。第 6 代日本ペンクラブ会長、私小説批判で有名。	祖父が受けた内村からのキリスト教の感化を回顧。
前田陽一	1911 - 1987 (明治 44-昭和 62)	フランス文学者、父は文部大臣を務めた教育家の前田多門。妹は神谷美恵子。	青年時代の愛読書『内村鑑三隨筆集』。
森 有正	1911 - 1976 (明治 44-昭和 51)	哲学者、フランス文学者。明治時代の政治家森有礼の孫。	『内村鑑三』を著し、高く評価。
関根正雄	1912 - 2000 (大正元-平成 12)	キリスト教無教会主義の伝道者。岩波文庫版の読みやすい旧約聖書の翻訳を提供。	大学時代に内村聖書研究会に入会。
森 敦	1912 - 1989 (明治 45-平成元)	小説家。「月山」で、1974 年に第 70 回芥川龍之介賞受賞。	内村の『後世への最大遺物』に鼓舞される。
福田恆存	1912 - 1994 (大正元-平成 6)	評論家、翻訳家、劇作家、演出家。平和論への批判を早くから行った保守派の文化人。	現代の平和論者と内村の違いを主張。
丸山眞男	1914 - 1996 (大正 3-平成 8)	政治学者、思想史家。大正デモクラシーの潮流のなかで思想形成。	「独立自尊」の士として論吉等と共に内村を評価。
加藤周一	1919 - 2008 (大正 8-平成 20)	評論家。医学博士（専門は内科学、血液学）。ベルリン自由大学などを歴任。	『日本文学史序説』で、内村の業績について述べる。
安岡章太郎	1920 - 2013 (大正 9-平成 25)	小説家。批評家としても文壇の評価が高く、芥川賞をはじめ大佛次郎賞等の選考委員も務めた。	正宗白鳥の評伝『内村鑑三』を通じて内村に関心。
橋川文三	1922 - 1983 (大正 11-昭和 58)	政治学研究者、政治思想史研究者、評論家。1960 年に、『日本浪漫派批判序説』を刊行。	内村に、代表的日本人西郷隆盛を重ねて、尊敬。
大岡 信	1931 - 2017 (昭和 6-平成 29)	詩人、評論家。菊池寛賞など受賞多数。日本ペンクラブ 11 代会長も歴任。	内村の『地人論』に日本国の世界史的使命を感得。

② 「芸術家」たち

<彫刻家：萩原碌山、ジャーナリスト：清沢洌>

美術でも、例えば、信州安曇野出身の近代彫刻で有名な萩原碌山がいる。信州安曇野に「研成義塾」という学校があった。これは、内村鑑三の弟子に当たる井口喜源治¹³ が作った学校である。

その学校を出たジャーナリストで『暗黒日記』を書いた清沢洌¹⁴ がいる。彼は、戦前、反骨のジャーナリストとして活躍した。清沢洌も実は「研成義塾」を出てアメリカ留学をした人物である。

<作曲家：信時潔>

そのほかに、「海ゆかば」を作曲した信時潔 がいる。この人のお父さんは牧師の吉岡弘毅である。彼は大阪北教会の初代牧師で、内村鑑三より年上だが内村と付き合っていた人である。この吉岡弘毅という人は、実は幕末の志士で、明治になってから漢訳聖書を読んでクリスチャンになった。いわゆる「侍クリスチャン」の元祖である。この人の三男が吉岡潔で、信時家に養子に行き信時潔となった。

因みに、信時潔の「海ゆかば」は、いろいろ批判もあるが、名曲と言われている。あれは「明治の精神」である。信時潔はバッハとベートーヴェン、特にバッハを徹底的に学んだ。彼は大阪北教会に行っていたので、讃美歌などを聞いていた。特に学生の時に東京音楽大学、今の東京芸大に在籍していた時に、いわゆるバッハの宗教曲、コラールを聴いて、これはもう日本に絶対ないものだ、このバッハのコラールはすばらしいと感動した。名曲「海ゆかば」は、言わば、1200年前の大伴家持の詩につけたバッハのコラールである。だからこそ名曲なのである。

近代日本の「明治の精神」は、あえて言えば日本そのものではない。日本の台木に西洋を接ぎ木したものである。これが明治である。バッハのコラールで大伴家持を作曲した、だから名曲である。例えば、山田耕筰は長唄交響曲を作った。長唄そのものをオーケストラで演奏しているが評価できない。信時潔は、和楽器は絶対使わない。しかし、精神は日本人である。バッハのコラールに大伴家持の日本語を載せた。そのことによって近代日本人の心の最も奥深くに達する曲「海ゆかば」ができた。例えば、今から100年後、200年後の日本人に、昭和とは何だったのかと問われたら、「海ゆかば」を一曲聴かせればいい。そこには、日本人が、何を考え、どう生きたかが詰まっている。バッハのコラールに大伴家持が入っている。これが明治である。

¹³ 井口喜源治（1870-1938<明治3-昭和13>）：長野県安曇野市出身で、キリスト教精神に基づく私塾「研成義塾」の創設者。

¹⁴ 清沢清（1890-1945<明治23-昭和20>）：ジャーナリスト、評論家。長野県生まれ。外交問題、特に日米関係の評論で知られ、またその太平洋戦争下における日記が『暗黒日記』として戦後公刊されたことでも名高い。

<洋画家：小出檜重>

信時潔の大阪の市岡高校の同級生に洋画家の小出檜重¹⁵がいた。日本的な洋画を描いた小出檜重。東の小出檜重、西の岸田劉生¹⁶。小出檜重もヨーロッパに行くが、半年で帰国する。帰ってきて小出檜重は、特に日本女性のヌードの絵を描いた。他の画家は、ヨーロッパ人の裸は描いたが、日本女性の裸は描けなかった。小出は、日本の大阪の女性の裸を堂々と描けた。まさに洋画を日本文化にした。ただ西洋を真似したのではなく、このようなことができたのがすごいことである。

IV 内村鑑三の墓碑銘が語る、その「志」

(1) 内村鑑三が愛する「二つの J」—Jesus と Japan

アマースト大学で内村鑑三が使った英文の聖書の扉に、将来自ら墓に刻まれる言葉、いわゆる墓碑銘を書いた。「I for Japan / Japan for the World / The World for Christ / And All for God」である。これは、実際、墓に彫られている。これに近いものに「二つの J」というものがある。「私は二つのものを愛する。「二つの J」を愛する、ジーザスとジャパンである。その他を愛さない。」その他を愛さないところが重要である。「二つの J」を愛するが、その他を愛さない。別にそれは書かなくてもいいのだが、その他を愛さないというのが内村らしい。二つのもの Jesus と Japan を徹底して愛する。その他を愛さないということが内村のラディカルなところである。

① 螺旋構造をとる「二つの J」

「二つの J」は平面的に並んでいるように見えるが、墓碑銘の方が正確である。I for Japan である。Japan for the World である。The World for Christ である。And All for God である。螺旋的に上がっていく。

いわゆる保守主義者とか日本主義者と言われる人は日本にあふれているが、I for Japan で終わっている。I for Japan の人はえらいが、I for Japan で止まっている。今のキリスト教者の多くの方がよくないのは、I for Christ となっていること、Japan を飛ばしている。直接的に I for Christ になっている。内村は、I for Japan、Japan for the world、螺旋的に上がっていく。これがすごいところである。

I for Japan ではだめで、また、I for Christ でもダメである。そこには悩みがない。I for Japan と言っている方が楽である。私は日本主義ですと言って、国旗を持って皆で万歳していればい

¹⁵ 小出檜重 (1887 - 1931<明治 20-昭和 6>) : 大正から昭和初期の洋画家。晩年に集中して描かれた裸婦像は、西洋絵画に見られる理想化された裸婦像とは一線を画した、日本人による日本独自の裸婦表現を確立したのものとして高く評価される。

¹⁶ 岸田劉生 (1891-1929<明治 24-昭和 4>) : 大正～昭和初期の洋画家。劉生の初期の作品はポスト印象派、特にセザンヌの影響が強いが、この頃からヨーロッパのルネサンスやバロックの巨匠、特にデューラーの影響が顕著な写実的作風に移っていく。1914年(大正3年)に娘の麗子が誕生、1918年以降に彼女をモデルとした多くの「麗子像」を描く。

い。I for Christ と言って、イエス様、イエス様って言うていけばいい。こんな楽なことはない。

日本というものがその間に挟まるから、内村はあのような顔になっていた。日本人としてどうするかという問題を飛ばして、I for Christ と言うていけばこんな楽なことはない。そうではなく螺旋として上っていく。その苦しみの中であの顔になった。

志賀直哉は、若い頃、内村の顔は日本で最もいい顔だと言っている。中村光夫に言わせれば志賀直哉は内村鑑三の顔だけ分かった、信仰は何も分からなかったと悪口を言っている。しかし、顔だけでも分かれば立派なものである。

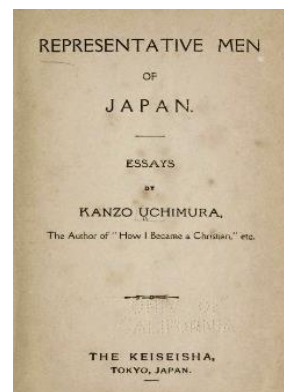
② 「I for…」の形をとる「二つのJ」

墓碑銘がすごいのは、I for Japan の I が、ただ、何もなくて立っていることである。戦後の日本はすべて逆である。Japan for me、The World for me である。しかし、墓碑銘では、I がまず立つ。すべて for のために立つ。I に向う for は何もない。これが明治の「侍クリスチャン」と言われる内村の立ち姿である。これが「明治の精神」である。戦後はすべて逆になる。God for me、Japan for me。日本は何かしてください、神は何かしてください。しかし、内村ではただ I がすべて for になる。何の見返りもない。これが「明治の精神」のすごいところである。戦後はすべて for me になる。me のためにすべてを、となってくる。I for と for me はベクトルが違う。for me の中でいろいろ批判しても仕方ない。内村のすごいのはこれである。この精神が「明治の精神」の典型である。

(2) 内村鑑三の精神の在処

① 内村鑑三の著作『代表的日本人』¹⁷

彼は日本のために『代表的日本人』というすごいものを書いた。John F Kennedy が大統領になったときに、日本の記者が日本の政治家の中で、誰か尊敬している人はいますかと聞いたところ、John F Kennedy が Yozan Uesugi と言った。日本の記者は知らない。Yozan Uesugi を John F Kennedy が日本の政治家として言っているが、それは誰だと日本の本社に電話した。本社も調べた。これは笑い話であるが上杉鷹山¹⁸ である。なぜ、John F Kennedy が上杉鷹山のことを言ったかという、内村鑑三の『Representative men of Japan』（『代表的日本人』という英文著作）の中で上杉鷹山を書いたからである。それを Kennedy が読んでいたか、それとも先生か



Kanzo Utimura
「Representative men of
Japan essays.」
(Tokyo, : Keiseisha)

¹⁷ 『代表的日本人』：1894年『Japan and the Japanese』出版。その後、日清戦争、日露戦争を経て『Representative Men of Japan』（『代表的日本人』）という名で改訂された。1899年新渡戸稲造『武士道』、1906年岡倉天心『茶の本』の影響を受け、海外に向け、日本の道徳や宗教を示した英文の著作である。ら代表的な日本人として西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮の5人を選んだ。

¹⁸ 上杉鷹山（1751-1822<寛延4-文政5>）：出羽国米沢藩9代藩主。領地返上寸前の米沢藩再生のきっかけを作り、江戸時代屈指の名君として知られている。

ら学んだのかは分からないが、少なくとも知っていた。岡倉天心は『茶の本』を英語で書いていて、日露戦争の時も役にたった。新渡戸稲造は『武士道』を英文で書いていた。内村鑑三は『代表的日本人』を書いていた。明治の方がよほど国際的である。『代表的日本人』とか『武士道』の英語は、格調が高すぎて、今のアメリカ人には読めないらしい。Queens English による格調の高い英語で書かれている。

② 「内村鑑三」の神髄、エキセントリック

その後、結局、大正時代は全然閉塞していく、戦前も閉塞していく。戦後はアメリカしか見ていない。ある意味では広そうに見えて全然狭い。

内村鑑三は、ストレートに言うとエキセントリックである。常識的な男ではない。普通の意味でのいい人でもない。エキセントリックというのは、普通、中心が外にあることで、センターから外れた人ということである。エキセントリックというのは中心から外れた少し変なやつと思われているが、そうではない。エキセントリックというのはセンターが外にある。自分という人間の本当のセンターを外に持った人間である。自分という人間の内部の真ん中でなんとなく収まっているのではない。これが「明治の精神」の人たちに通じるころである。

③ 「侍クリスチャン」の誕生

なぜ明治の侍の子供たちが「侍クリスチャン」になったかは不思議である。なぜ江戸時代末まで禁教されていたキリスト教が、やっと 1872 (明治 5) 年になって解かれたか。内村は、1878 (明治 11) 年頃洗礼を受けた。その時、まだ解禁されてから 6 年しか経っていない。なぜこの侍の優秀な子供たちがクリスチャンになったか。これは、当時のキリスト教が、今のキリスト教とは異なり、I for Christ のキリスト教だった。札幌農学校のすごいところは、牧師がいたことではない。南軍の兵士でもあったクラーク先生という軍人が、このキリスト教を持ってきたところにある。

明治の 3 大バンドは札幌と熊本と横浜である。熊本は、「ラストサムライ」という映画の元になったが、ジェーンズ大尉¹⁹という軍人が熊本に来て、できたのが熊本バンドである。同志社を作った新島襄²⁰の下に集まった者はすべて熊本バンドの出身者であった。熊本バンドがつぶれた後、新島襄のところに行ったのが



熊本バンド主要メンバー
Public domain, Wikimedia Commons

¹⁹ ジェーンズ大尉 (Leroy Lansing Janes, 1838 - 1909) : アメリカ陸軍の軍人。退役後は日本で熊本洋学校を設立し、熊本バンドの礎を築いた。

²⁰ 新島襄 : (1843-1890 <天保 14-明治 23>) : キリスト教の教育者である。江戸時代の 1864 (元治元) 年に密出国してアメリカ合州国に渡り、そこでキリスト新教に入信して神学を学ぶ。そして、改革教会 (カルバン主義) の清教徒運動の流れをくむ組合派系の伝道団体である「アメリカン・ボード」の宣教師となった。日本に帰った後の 1875 (明治 8) 年にアメリカン・ボードの力添えによって京都府にて同志社英学校 (後の同志社大学) を開いた。

徳富蘇峰²¹であり、海老名弾正である。海老名弾正は同志社大学の総長となった。

おわりに - 「明治の精神」を学び直す

本当の教育というものが持っていた理念の下に作られた学校が、結局学校経営のレベルでつぶれていった。小諸義塾も、研成義塾もそうである。明治にできたこのような学校が、今すべて無くなっている。福沢諭吉の慶應義塾だけが、ある意味では生き残った。小諸義塾には、木村熊二²²というすごい男がいた。島崎藤村はその小諸義塾の先生であった。小諸で『破戒』を書いた。こういう明治の気風というものを根本的に見直さないと、日本の再建はないのではないか。

今、アメリカ、アメリカと言っているが、あのような物質主義と日本人が本当に戦うためには、内村鑑三のようなラディカルな、エキセントリックな思想まで戻らないと、結局やられてしまう。そのためにも、内村鑑三という最も近代日本を根源的に批判した人間まで戻るべきではないか。

補遺

「内村鑑三」の像を、言語で彫刻する

私は「論」を書いてはいけないと思っている。内村鑑三論ではない。内村鑑三そのものである。「論」は結局「論」以上のものではない。内村鑑三の像を作っているつもりである。論じる気はない。論じても、本質に達することはできない。

例えば、バルザックというフランスの大作家がいる。バルザック論というすばらしい「論」がある。確かに勉強になる。しかし、バルザックの本質を見抜いたのは誰かと言えば、彫刻家のロダンである。日本にも箱根にその彫刻のある美術館がある。上野にもある。ロダンのバルザック像。あれが最高のバルザックである。

内村鑑三論などはやりたくない。ロダンがバルザック像を作ったように、内村鑑三の像を作りたい。最初からそう思っていた。それで、タイトルは最初、出版社の人から、タイトルは「内村鑑三論」でいいかと言われた。いや、「内村鑑三」でと。うん、なるほど、というわけである。

私には、「論」を書いた本は一冊もない。信時潔は「信時潔」。論ずることによって達するものはない。期待していない。興味もない。ものを作る、内村鑑三の像を作る。言葉によって彫刻する。言葉というのも一種粘土のようなものである。言葉という粘土で像を作る。そ

²¹ 徳富蘇峰 (1863- 1957<文久3-昭和32>) : 明治から昭和戦後期にかけての日本のジャーナリスト、思想家、歴史家、評論家。『國民新聞』を主宰し、大著『近世日本国民史』を著したことで知られる。

²² 木村熊二 (1845-1927<弘化2-(昭和2)>) : 日本のキリスト教牧師・教育者。明治期、妻の木村鏡子とともに東京において明治女学校を創設、またその後移った長野県小諸で小諸義塾を開設した。

ういうふう言葉に思わないといけない。

私は内村鑑三と出会ったのは 33 歳のときである。それは『ロマ書の研究』²³という文庫本によってであった。その文庫本は、今はない。強いて言えば、岩波茂雄は立派な人だった。しかし、戦後の岩波書店は変わってしまった。岩波文庫に『ロマ書の研究』は入っていない。岩波書店が内村鑑三のものを出すのは『余は如何にして基督信徒となりしか』と『代表的日本人』だけである。いわゆる明治の知識人として啓蒙的な活動を行った役に立つ内村鑑三はいいが、『ロマ書の研究』はどうかとなる。いろいろな対談で『ロマ書の研究』を入れなければいけないのではないかとっているが、入らない。

ところが、明治、大正の人たちは『ロマ書の研究』を受け止めた。今の岩波書店とか知識人など『代表的日本人』はすごい。しかし、『ロマ書の研究』はどうかとなる。この違いは実に大きい。これらがある限り、単なるインテリで終わる。内村鑑三はインテリを打ち砕く。志賀直哉などは打ち砕かれた。矢内原忠雄、南原繁、丸山真男などは、偉い人と言われているが、内村鑑三をよく分かっている。

²³ 『ロマ書の研究』：内村鑑三が 1921-2 年に行なったロマ書講演の筆記、自著の講演補遺と講演約説からなる。「内村鑑三の生涯をかけた聖書研究の最高峰であり、近代日本人に残した、最大の信仰的メッセージである。」(富岡幸一郎)。

質疑応答

- Q 1 内村鑑三の墓碑銘の現代的意義を考え、この Christ あるいは God の部分を、the world for Nature、あるいは all for Planet と読み換えられないか。
- Q 2 「明治の精神」は、徳川時代に培われた儒教倫理を台木として、そこに接ぎ木されたことで、光彩を放つこととなったのではないか。

Q 1 内村鑑三の墓碑銘の現代的意義を考え、この Christ あるいは God の部分を、the world for Nature、あるいは all for Planet と読み換えられないか。

南方熊楠をどう評価されているのか。また、内村鑑三の最期の言葉、墓標に書かれている「I for Japan, Japan for the world, the world for Christ, and all for God」という言葉の中で、2フレーズ目まではすごく共感できるが、3フレーズ目の world for Christ はやはり昔のキリスト教だと思う。今、我々は何を接ぎ木し、新しい思想にするのかが課題である。そこで私自身は先ほどの南方熊楠と組み合わせると the world for nature、あるいは最後は all for planet というのか、そのようなことになるのではないかと思っている。この Christ あるいは God という言葉をどう置き換えられるのか、このままでいいと思っておられるのか。

(新保)

南方熊楠の表面的なことは知っているが、実はあまり読んでいない。God ではなく、Nature で Planet ではないかというのは、そうとも言えるし、そうでないとも言える。キリスト教も新約になって2000年続いてきた。今いろいろキリスト教原理主義とか、トランプ大統領も愛読書が聖書であるなど、いろいろある。しかし、今のトランプ大統領とか、アメリカのキリスト教が変だから、キリスト教そのものが変だというふうに思っはいけないのではないか。人は宗教にしても思想にしてもいろいろな見方をする。

内村鑑三はキリスト教を逆輸出する。結局日本の自分たちが実践してきたキリスト教は、いわゆるルターが実践した宗教改革である。ヨーロッパのキリスト教、特にアメリカのキリスト教は、いわゆるトランプ的なキリスト教、ご利益宗教になっている。これは本来のキリスト教徒とは全然違う。

明治になって内村鑑三たちが日本で行っているのは、本来のキリスト教、ルターとかパウロのキリスト教を、ヨーロッパとかに、逆に日本から輸出することである。誇大妄想的なことを言っていると思われるが、そうではなくて、彼は本当にそう思っていた。

キリスト教はご存知のように、もうヨーロッパの宗教ではない。ヨーロッパには修道院など無くなってきているし、修道女はアフリカ人も多い。イタリアの修道院にもイタリア人だけではない。ほとんどキリスト教は今、アフリカと南米の宗教となっている。アメリカのキリスト教は少し特殊なアメリカの宗教である。いわゆるカトリック的キリスト教は、もうアフリカと南米のものである。やがて、ローマ法王もアフリカから出る。キリスト教が西洋の

宗教と思っている観念は捨てた方がいい。そのことは、カール・バルトが、キリスト教は西洋ではもう終わっていて、東洋に新しいキリスト教が、新しいというのは生き生きとした生命力を持ったキリスト教が生まれてきているのではないかと書いている。

私が編集した『内村鑑三』（別冊『環』⑱）の巻頭に、「今、何故内村鑑三か」というタイトルで論文を書いたが、そのサブタイトルを、「キリスト教は西洋の宗教ではない」とした。キリスト教はもう西洋の宗教ではない。キリスト教は、もとはシリアの、東洋の宗教である。それがたまたまパウロの伝道を含めてローマ帝国によって西洋で伝わっただけである。特に内村鑑三が言っているのは、パウロのキリスト教である。内村鑑三というのは、いわば近代日本においてのパウロとして出現したということである。そういう意味ではパウロのキリスト教というのは西洋のキリスト教でもないし、アジアのキリスト教でもない。

だから今のキリスト教の状況とか、南米のキリスト教の騒ぎをみて、キリスト教が終わったと言うのはちょっと短絡かなと思う。それと、例えば我々が、今言ったように、少なくとも明治以降の日本文化、あるいは例えば、ベートーヴェンを聴いてもキリスト教のことを本当に深く分かっていないと、ベートーヴェンは分からない。いわゆるキリスト教の本当のところを内村鑑三たちは追求してきたが、そのようなことをしないで、日本人はベートーヴェンとかブラームスとかを聴いてきた。つまり表面的な文化としてのベートーヴェンを聴いてきたに過ぎない。それが日本人の浅さの問題であって、西洋のバッハであり、ブラームスであり、セザンヌであり、ゴッホでありを、的確に理解するためには、キリスト教に対する深い理解と共感がなければならない。

日本人の西洋文化、西洋文学の紹介者は全く間違っている。それは単に日本人に合わせて、日本人の口に合わせて団子を作ったようなものである。そういう西洋の文化をまともに受けて作った日本の芸術家の芸術を分かるためにもキリスト教を的確に分かっていないと、表面的な理解になる。

内村鑑三は、晩年少しニュアンスを変えているが、1901（明治34）年の若い頃、まだ40代の頃、日本国には大困難があると言っていた。日本の大困難のその最大の困難は何であるか。明白に言うと、それは日本人がキリスト教を採用せずして、キリスト教文明を採用したことである。これがずっと続いている。だからあの顔になる。要は、アジア人にはあるが、我々は今背広を着たり、憲法がどうだ、民主主義がどうだといいながら、いわゆる全部キリスト教文明を取り入れている。しかし、日本人はアジアの他の国と違って非常に伝統のある国であったから、キリスト教を排除して断ってきた。これが何とも知れない矛盾を生んでいる。日本の場合、何とも変な感じがずっと残っている。これは大変なことであって我々日本人の宿命である。これが近代日本人の宿命である。これは遅れて1868年に開国した日本の宿命である。

その時、ヨーロッパが世界の中心だった。「我々は西洋人の文物は何でもいる。その鉄道もいる、電信もいる、電話もいる。」内村らしい文体であるが、「その憲法もいる、法律もいる。経済もいる。銀行制度もいる。その工学もいる、講座学もいる、生理学もいる。文学も

いる。美術もいる。哲学もいる。皆んないる。しかしながら唯一いないものは西洋の宗教である、耶蘇である。キリスト教はいらない、道徳は日本の道徳で十分である。耶蘇は排斥すべきものである。物質文明は西洋から学んだ。」これは、日本近代の根本的な問題である。西洋の仕組みを全部取り入れているけれども、しかし、民主主義にしてもキリスト教から出発しているわけである。

例えば吉野作造とかも誤解されている。吉野作造は海老名が本郷教会の牧師だったときのクリスチャンである。彼は日本に民本主義を取り入れた人物である。普通学者は「民本主義」のことは書くが、吉野作造の主張で引用されない文章がある。吉野作造は、日本に本当に民主主義を根付かせるためには、キリスト教を取り上げなければいけないと書いている。民本主義といって皆ごまかそうとする。吉野作造は、海老名弾正を最も尊敬している。いづれにせよ、西洋を分かるためのキリスト教が分からないから、バッハも、ベートーヴェンも分からない。明治以降の日本の芸術、文化、技術を理解するためにもキリスト教が分からないといけないことを、特に大正、戦後以降、本当に分からなくなってしまっている。新しい約束と旧約とは違う、何の約束なのかが分からない。したがって、シェークスピアも、ダンテも分からない。

だが、日本人は賢い民族である。いい意味でも悪い意味でも、日本人は非常にクレバーな民族だから、うまく取捨選択する。この取捨選択していることが本当にいいのか。ずる賢かったのではないか。もっとまともにぶつかるべきではなかったのか。まともにぶつかれば近代化は遅れたであろう。日本はなぜこのように早く近代化したのか。上すべりにやったからである。せつかく幕末には日本なりの近代が生まれてきたのだから、本当はあと 300 年くらい経って近代化すべきだった。しかし、一気に黒船が来たのだから仕方なかった。そのことが悩ましいところであり、日本は大変厳しいところにいることを思わないといけない。

いま経済大国になっているから、うまく日本は近代化したと言っているのはどうかと思う。明治に日本が近代化したときに、日本のことを最も軽蔑したのが、韓国と中国であった。韓国人が日本人のことを最も軽蔑した。日本人は伝統を捨てて猿真似している。最も日本はそうしたことに関係なく、ひたすら近代化に突き進んだ。我々は、それで今まではいいと思っていた。中国、韓国は勉強していない、学ぶ力がないものと思っていた。しかし、それはヨーロッパとか欧米が先進国だったから言えたことである。今のように、ヨーロッパはもう先進国ではない。あれは先に腐っているだけだ。先に近代が腐り出しているわけだ。だからヨーロッパがやっていることを日本はまだやっていないではないかと言う新聞、メディアがあるがお粗末である。ヨーロッパは先に腐りだしている。日本だって腐っている。ヨーロッパのいろいろな今やっていることは、フランスなんかだって腐っている。そう考えると、ヨーロッパの近代を日本はただひたすら取り入れたが、中国のようにどしっと構えてた方がよかったのではないかと少しは思う。独自の中国秩序でヨーロッパもいずれ中国化する、世界を中国化するなど意外だが、できるかもしれない。ヨーロッパの近代が正しいものだと思った日本が、長い目で見れば梯子を外される可能性だってある。だから日本が早々と近代

化したことの問題がこれから出てくるというのではないか。

Q2 「明治の精神」は、徳川時代に培われた儒教倫理を台木として、そこに接ぎ木されたことで、光彩を放つこととなったのではないか。

幕末から明治初頭にかけて、徳川時代の朱子学的な、儒教的な倫理がずっと根深くあり、儒教倫理とか、儒教的な価値観という受け皿でもって、キリスト教を理解したということではないか。だから明治維新を「明治の精神」と考える場合に、やはり日本人が唐の時代からずっと受け継いできて血肉化した儒教倫理が内村鑑三にもあったと思う。そういう儒教倫理を台木として、そこに接ぎ木されたものではないか。

(新保)

儒教倫理といっても日本的倫理だと思う。江戸時代の儒教は中国の儒教のままではなく、日本化したものであったので、言葉は儒教であるが日本化されたものだと思う。

土台は、司馬遼太郎さんが面白いことを言っている。明治という国家はすばらしい。江戸時代は神なきプロテスタンチズムだったと言っている。江戸時代の職人、大工さんとかが、作業が終わった後片付けをする。日本人は片付けて帰る。職人的な清潔感とか、しっかりやるとか、約束は守り絶対その時間に行くとか、そういうことが武士に限らず職人にいたるまでである。プロテスタントか、カトリックかという、プロテスタントが、「明治の精神」にすごく影響を与えた。漢学者として最高だった中村正直が、イギリスのスマイルズの「Self Help」という本を訳し、『西国立志篇』として出した。これが福沢諭吉の『学問ノススメ』と並ぶ二大ベストセラーとなって若者は皆読んだ。その「Self Help」の冒頭には、「天は自ら助けるものを助く」と、英語で書かれている。この「天は自ら助けるものを助く」。これがプロテスタントである。カトリックでは、これは「天は全ての人を助ける」である。今、債務超過国はすべてカトリックの国である。南米とスペインとイタリア。プロテスタント系の国、例えばドイツ、英国が頑張っている。

人間には天職がある。神から与えられた仕事をやる。宗教改革によって、近代が始まる。ご指摘のとおり、江戸時代のものがベースとしてあった。その時、司馬遼太郎さんが言ったのは、日本は神なきプロテスタンチズムで気風がすごくプロテスタントと似ていた。カトリックとは違ってたと。戦国時代のザビエルはカトリックだが、明治維新のときに来たのは基本的にプロテスタントであった。イギリス、アメリカのプロテスタントが来た。そこで多分自分を律するだとか、努力することはいいのだとかいうことで、びたっとおそらくあまり抵抗なくきたと思う。それとまた当時のアメリカのキリスト教は立派であり、立派な人が来た。本当に日本に死ぬつもりでくるような人がいっぱい来た。

面白いのは山田風太郎という天才作家が『明治小説』という面白いものを書いている。ちくま文庫で12巻出ている。最後の作品が『明治十手架』である。これにはモデルがいて、原胤昭というすごい人だった。明治維新後にクリスチャンになる。戦っていた十手が欠け、十字架になったと。そこでタイトルが『明治十手架』となる。彼はこの後、監獄に勤めて、

刑務所から出てきた人の更生を最初に行った人であった。「侍クリスチャン」の典型である。そういう原胤明のような人間、まさに与力だった男が変わった。単なる個人の救いとは違う。内村鑑三たちは個人の悩みを救うためにキリスト教に入ったわけではない。極論すると日本国とか世界を救うために入っている。日本国を精神的に立て直すために入っている。自分の小さな悩みを、痛みを救われるために入ったのではないと、書いている。

ところが今の宗教は、自分の小さな痛みを直すための宗教である。これが決定的に明治のクリスチャンと違う。そういう意味では江戸時代の武士とか職人たちは、いずれにせよ、自分だけではない世界がある。そういう精神性の中でキリスト教は入ったのではないかと思う。だから「侍クリスチャン」の存在は本当に人間の精神の劇としては非常に興味の深い、人間の精神が変わるのはどういうことか、いわゆる劇的なドラマがここで起きていたと思う。

大事は、「自己」を恃みて生きるところにある。

私は、大学卒業後、出光興産というユニークな会社に就職した。創業者の出光佐三は、百田尚樹氏の『海賊とよばれた男』のモデルである。この小説は、本屋大賞を受賞するなど大変話題になった。映画化もされ、俳優の岡田准一が主演を演じた。

出光佐三は、様々な金言を遺しているが、その一つに「卒業証書を捨てよ」というものがある。私が入社した昭和52年には、まだ出光佐三は元気だったので、入社式でこの言葉を聞いたのである。大学を出て入社式に臨んだ青年に、「卒業証書を捨てよ」と言うところが出光精神である。

事実、4月から7月の暑い時までの4カ月間、ガソリンスタンドで実習した。これが、その後の人生にとって大変役に立ったと思う。皆さんも、大学で勉強するのは大いに結構だが、実社会に出てからは一旦「卒業証書」を捨てて生きて行くことを勧めたい。

もう一つ、伝えたいのは、今回取り上げた内村鑑三のものである。内村鑑三に「成功の秘訣」という金言がある。これは、晩年の内村が避暑に使っていた中軽井沢の星野温泉の三代目の星野嘉助に与えたものである。

- 一、 自己に頼るべし、他人に頼るべからず。
- 一、 本を固うすべし、然らば事業は自づから発展すべし。
- 一、 急ぐべからず、自働車の如きも成るべく徐行すべし。
- 一、 成功本位の米国主義に倣ふべからず、誠実本位の日本主義に則るべし。
- 一、 濫費は罪惡なりと知るべし。
- 一、 能く天の命に聴いて行ふべし。自ら己が運命を作らんと欲すべからず。
- 一、 雇人は兄弟と思ふべし、客人は家族として扱ふべし。
- 一、 誠実に由りて得たる信用は最大の財産と知るべし。
- 一、 清潔、整頓、堅実を主とすべし。
- 一、 人もし全世界と得るとも其靈魂を失はば何の益あらんや。人生の目的は金錢を得るに非ず、品性を完成するにあり。

当時、若主人であった嘉助は、この10か条を家憲とした。これを熟読玩味することを願っている。

2019年2月1日制作

編集・制作 公益財団法人国際高等研究所
I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監 修 池内 了 猪木武徳 佐伯啓思 高橋義人

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)